Newsletter　Citizen's eyes　vol.9 臨時増刊号

2020 年８月２日発行／ジャーナリズムを考える市民連絡会とやま
連絡先☎ 090-4680-6336　https://civic-journalism.wixsite.com/mysite

座談会を開くにあたり

大島　　甲田さんが先日発行したニュースレター vol.7 の文章が最後ということで書き手の方を新たに見つける必要があることと、ニュースレターを７号まで作成してきたが、ネット環境にない会員のための通信として、ブログに載せている毎月のオピニオンを載せて作成し、活用してきたという限定的な使い方しかしてきませんでしたので、結成１周年を２か月前にあたり、今後の会の活動を充実させていくうえでも、このニュースレターの限定的な位置づけも再考する話し合いを持ちたいと思い、急ですが、この間ニュースレターの作成に直接かかわってきた編集担当の皆さんとこの間２度のオピニオンを寄稿してもらった小原さんに集まってもらいました。

早速ですがまずは７号まで作ってきて気づいたことや感想を、勝手ですがアイウエオ順で（笑い「こんなん初めて」「面白い」）おひとりずつお願いします。

まずは甲田さん…

世に問うなら有料で

甲田　　いつも思うのは、リタイアしてボサーとして遊んでいると、自分が安全地帯にいて好き勝手に言うのが凄くはばかられるというか申しわけないというのが最近とみに強くなってきています。こう書いていると、若い人から「甲田さん、いいわね」と言われても、本当にそういう若い人たちに響く言葉や態度をなかなか出せない。本音であったとしても偽善者めいてしまう。そういうところがひっかかって、６月オピニオンに書いた噂の真相を例に、一つは私自身の中で、一種の市場原理みたいものがあっていいという思いがあり、ただ無償で、無料で配るというよりも、世に問うのであれば、一部 500 円ぐらいで質をよくした有料のものがあっていいと。そういうリスクがあって廃刊に追い込まれれば存在感がなくなったということでいいのでないか。何か無償で、これ見よがしにやる後ろめたさがあって、今日私がなかなか難しいなと思うところで、私の原稿の結論がそういうことであったということです。

大島　　ニュースレター全般についてはどうですか。

甲田　　書いておられるなという感じで受け止められていて、そういうものだということです。誰を対象にしているか。現在現役でやっているマスコミ関連の人たちに響くようにチェックできるようにというのが趣旨であれば、彼らが受け取る実感というのはそういうものでないかなと思います。

小原　　時間に余裕がある人が趣味的にやっているという。

甲田　　そうそう。

大島　　次は小原さん…

ニュースレターの位置づけと活用は詰めるべき

小原　　私は書いているだけで大島さんが来いと言うから来ただけです。

メールで貼り付けて一回、一回作っていますが、確かにこれをどう活用するのかについてはいつも思うのですね。最初は各メデイアに送るのかと思っていた。紙にしなくても送るのかと思っていたのが、送らないという話だったからそうなのかと。

ニュースレターの内容ですが、富山で見えるもの、見えないものが両方入っているなと印象は持ちます。

例えば朝日町の竹田講演会のことなんか、あれは富山だから問題視できたことです。たまたま朝日町でやることがわかって、地元の人がこんなんあるよと声を上げてくれたので、私たちも知って、メデイアにおかしいのでないかとか記事の書き方も問題だと言えた。だから富山発というのは一定程度やれているなと。チューリップテレビの報道とか、毎回それなりに富山発がちゃんと入っていると思ったのと、私は沖縄のことを書いていいと言われたので、沖縄の琉球新報からの情報を取り上げて書かしてもらったことがある。逆にそれは富山では見えない情報に分類できるかなと思いますが、富山では見えない視点で記事を拾い上げられているかは分かりませんが。

最初に言ったようにこのニュースレターをどう位置付け、どう活用していくか、会の会報ではないわけだから、それは詰めておいたほうが良いと思います。

大島　　では土井さん…

「やっとっこっちゃ」の言葉を投げかけられる市民運動の志の持続と課題達成の模索

土井　　私は一回も寄稿していないので、後ろめたいということでさえ思っていないのですが、この間私たちの会の問題点として、当初の目的としていたことが、私たちの問題もそうですが、相手方メデイアが十分に機能していないことがあって成り立っていないということがある。もう一つは冷たい言い方でいえば「やっとっこっちゃ」（勝手にやってりゃいい）と言われてしまうことはやむを得ないことでないか。

これは市民運動の多くは、そういう受け止め方があることを前提にしてやらざるを得ない。つまり、私は言ったり、思ったりしているのですが、気が付いた人が気が付いたことを、発信しないと物事は切り開かれていかないわけです。それを言い続けているからこそ問題点をあっそうだと思う人たちができて、それが時に大きな力になるのだと思う。ですから、目に見える形で結果が出なくても、そのことを意識してやり続けるということはとても大切なことでないかと思っていて、そういう意味では、こういう会が志を持ってやり続けることはとても大切と思います。

ただ課題はせっかくそうやっていることが、目的が達成できるようにどうすればできるのかをもう一つ模索し続けなければいけない。完全なことはできないにしてもやれることはやるということは大切なので、こうやって意見を出し合って、何かを見出していければいいと思います。

大島　　では堀江さん…

ニュースレターと例会の有機的活用を…今どきの新聞記者

堀江　　ニュースレターについてはそれぞれ言われたので、ニュースレターと例会が関連づけられていません。例

会に人がたくさん集まっていますよね。私が出ている中で一番多い。しかし活発に人が集まって、そこで話されたことをニュースレターに還元されていない。それが活動として残念な所で、例会の熱気がニュースを通じて伝わっていかない。

メデイアへの影響というのも全然感じられない。メデイアにはいろいろなテーマがあるが、個々の記者がテーマに関して取材とは別に勉強しようとか、そういう意識が低いのでないか。そういうことも、記者が集まらない原因だと思う。

前にも言いましたが、かっていろんな問題が起きると当事者を中心にメデイアの人も呼んで情報交換する場を設けると、関心を持っている記者が集まってきたわけです。例えば記者向けの勉強会（不二越問題で）をしても、そこに来ている記者は取材の一環です。当事者も支援者もいるのですが、何か記者が高飛車に質問をしたり、当事者に直接聞く機会であるにもかかわらず、当事者そっちのけで話を進めたりして勇気をもって裁判している原告へのリスペクトがない。世間一般の状況認識だけでは当事者の主張を理解できないわけで、そこをちゃんと聞いて情報を取るという意識があるのか。それが勉強会をやっても当事者の主張を読者にわかるように書けないところではないか。例えば某全国紙なんかは大きな事件など社会面に載るような記事を書くと即本社に転勤というのがあって、そういう勉強の場でも横柄に質問するような人が本社へ転勤していくという状況とかを目の当たりにしている。だから、地方でジャーナリズムを問題にしているニュースレターを読む人っていないんだなと思います。

でも土井さんが言われたように、発信し続けるしかない。自分が知りたいと思って調べたことを書こうかとか、たまたま知ったことを共有することは大事かなという思いはあるが、伝わっているかどうかわからない。

そういう中で大島さんが作り続ける意見や気持ちを聞きたい…。

大島　　日々のニュースなどへの気になる部分を Opinion として書いてもらい、ブログに載せる情報発信することにしましたが、ネット環境にない会員には読むことはできないのでその都度紙のメデイアのニュースレターも作ったほうがネット環境にない会員の方にも報告できると思い、ある程度読みやすくしてつくっています。ネット環境にない会員の方には例会報告もブログに載せていますがニュースレターと合わせてそれも別に印刷して送っています。ニュースレター pdf にすれば簡単に知り合いに送れるのでそういった利点もあります。また会の活動の紹介の際にも使えると思っていて、5 号まで作った時に、県内マスコミには、HP やブログの紹介と合わせて、1～5 号までを送りました。NHK 問題ｍｌで署名運動への参加申し込みをする際にもこのニュースレターを会の紹介として送っていて、勉強になるとか素晴らしい書き手がおられ、うらやましいという反応もあり、これが書き手も増えて充実してくれば、より活用が広がっていけるだろうと思っています。

大島　　それでは課題についてですが

甲田さん、小原さんの指摘から

土井　　それよりもまず、甲田さんが最初に問題提起したこと、小原さんが提起したことについて、いま我々ができることとできないこと、当初意図したことができないこと、いろいろあるじゃないですか、それらを問題意識として共有しないと。

メデイアと共有できない問題意識

堀江さんがご指摘したメデイアとの意見交換､本来私たちが疑問に思っていることを関係メデイアの人を呼んで、私たちはこう思っているけど、メデイアの人たちはどういう苦悩を持っているのか、それがなかなか実現できない理由は何か、バクとしてわかっているが、その辺の意見交換ができていない。どうしたらそれができるのか。準備会でチューリップテレビの人や他の記者が数人来られ、記者からそれどころでないと言われた。今は、私たちが持つ問題意識について議論をするような環境にはないというのは、メデイア側の一面の事実であるが、でも、それでいいのかという問題がもう一つある。

それでいいのかという問題。例えば指摘があった、かつてなら曲がりなりにも市民とメデイアとの間で意見交換するような場を作ろうと思えばできた。今それがまったくというほどできない。できない現実があって、それでい

いのかということがあるので、諦めないでどうしたらできるかについて、できるだけのことをやれないのか。我々の側でという問題意識としてはある。

何回か呼びかけてきて挫折感を味わい続けているが、例えば安保法制ができた時、共謀罪・秘密保護法ができた時に、これはメデイアに対する攻撃ですよと受け止められないかと言って、古巣の新聞労連傘下の北日本新聞労組役員と話し合いをしたのだが、全然問題意識がない。新研部長の政治部記者と話しても共通の舞台で議論ができない。

甲田さんと一時労働組合活動をしたことがあるから、自分の経験でいくとそうではなかったはずだ。当時県内でマスコミ共闘があったから北陸電力とやりあったことがある。そういう風な今そんなことを言ったって無理といえばそれまでなんだけど、新聞記者に籍を置く者としておかしいことはおかしいと思うはずだと思うことは今や幻想になったのかとさえ思う状態ですよ。でもそうでもないだろうと思いたい。総体としては劣化しているけど中にはこれはおかしいと思っている人がいるに違いないと思っている、実は。それがなかなか声に出せない。出せないから出そうとしない閉塞状態になっている。でも私は、それでもというのだが、今の労働組合も今の組織が未来永劫でなく、来年またメンバーが替わったら、その中にもしかしたら問題意識を持った者がいるかもしれない。それとヒットすることもあるかもしれないという願いがある。しかし、これもやっぱり幻想なのか。

甲田さん、あなたは私より少し若いから…。

様々な声を載せるメデイアへ

甲田　若い連中と話していると、孤立して仕事を辞めたいという人が凄く多いですね。そうすると、ジャーナリストが会社員になっている、雇用関係があるというところで自己抑制的になっている。その成れの果てが今のところに来ている。そこを取っ払うところに何があるか。

一つの空想であるが、これだけネット化してくるとメデイアというのが誰でも作れる。そうなれば記者であってもペンネームでもって寄稿したいとか、そういったものがあっていいだろうし、そこで手ごたえを感じてみるのもいいだろうし、高道さんがあれだけ市議会に食い込んでいるので、そこからの情報をこういうところに載せればいいのかとも思う。

そうすると一種の見せる編集力が合わせれば、折角のものがオーソライズできるように、来年の初めから挑戦する準備をしていく方向で変えてやっていくのがいいのかなと思っている。

土井　投稿を誘うようなしかけを考えればどうか。

堀江　対象をだれにするか選ぶ必要があるが、結局、こういう評論紙の対象というのは想定できない。発信する側の力量もあり、季刊にするとか…。甲田さんの言うように商品として社会に出すというのであれば、ジャーナリズムというテーマだけで買う人はいない。いろんなテーマ、地域のテーマを扱うしかない。

甲田　三協アルミに息子が勤めている人の話で、赤字が 4 期続いていると給料も減ってくるしどうなるかわからない。新聞を見ていると、本当の真実がわからないまま、ある日突然どうなるか。県内の雇用一つにしても本当のことをみんなにわからせようとしないオブラートに隠したままで、どうなるかねという話を聞いてみると、今の現状からいうと、そういったニーズ、本当のところはどうなのよというものへの深い取材と気づきへのニーズというものがあるのじゃないかなと私は思うのですが。

小原　そのような取材ができるの？

甲田　取材が問題なんですが、それなりの人に聞いてくればだいたいわかってくるのでないかと思うんだけどね。

堀江　そういうの、ゴシップ紙ですね？

甲田　　本質がわかれば、あとで「えー！」というのが早く気づいたら、というのがあるんじゃないか。

堀江　　そういうゴシップ紙は県内にも昔あった。新湊でも変な新聞がでていた…。

土井　　曲がりなりにも今まで何とか発行し続けてきたのは大島さんのご苦労によるわけです。ニュースレターを出すということに話し合ってやった結果ではない。大島さんの思いでここまで来ているのです。だからこのままずっと続けることができればいいが、なかなかそうはいかないと思うのでどうすればいいのかになる。
　色々意見が出ているけど難しいことなんですね。だから何ができるか。これを有償化して 1 部 500 円で売るという考えがあるけど難しいでしょう。無理とすれば次善の策として何ができるか。

例会時に、ニュースレターや前回例会の意見交換を

堀江　　メデイアの反応との関連でいうと、メンバーになっている人の反応も少ない。例えば、例会の時にニュースレターについての意見交換をするというのはどうでしょう。そうすれば、知り合いにすすめるとか、さらに印刷したものを配ることで関心を持つ人が増える可能性はある。

編集委員会の見直し

大島　　会報になると何を載せるかの検討のための本格的な編集委員会が必要になるが、その手間を割いてもらえるのでしょうか。

小原　　ニュースレターの編集担当者を決めたが、作る際にメールでの意見交換をしているのですか。

大島　　Opinion を載せることが決まっているので、送られてきた文章の校正のやり取りはするが、空きページやスペースができると会の ml に投稿しているもので非ネットの会員に伝えるべきものがあれば大島の裁量で載せるようにしており、その確認は編集担当の方に確認してもらっていますが、作成する前に事前に今回のニュースレターについてやり取りするというのはありません。

ニュースレターの位置づけを明確に

小原　　一つに、会の会報として、ニュースレターを位置づけるのか、市民連絡会の活動として会報とは別に考えて、今の位置づけのままでやっていくのかをまず決めたら？次の例会で決めること？

土井　　例会に決めるにしてもたたき台みたいものができれば。いずれにしてもニュースレターの位置づけは明確でない。

会の目的に沿った手立ての議論

　このジャーナリズムを考える会は何なのかという時に、集まっているメンバーに統一的な共有していることがあるのかと思う。今、現状のメデイアに対する不満で集まってきている。何とかならないかと思って来ているのだが、手立てが見つからないまま、その都度起きている事柄について、話題にして議論して帰っていく。
　そろそろ、この会の目的に沿った手立てをこれまでのものを肯定しつつ、前に行くようにするときにはどうすればいいのかということの議論に今日はならんだろう。

小原　　既存のメデイアでは得られない情報を得たいと思って参加する部分もある。

土井　　それぞれの分野で活躍している人が集まってきているから、新聞、テレビ、ラジオで放送されていないことなどについて知っている人が来ているので、それが提供されるということがあり、それは大変有意義なことなので、それをどうするか。せっかく得た情報を多くの人たちに共有してもらうか。それをどうすればいいかというこ

とを、今日、次回の例会のたたき台として提起できればいいのではないか。

「知事選」を特集　1 冊 500 円の試み

甲田　　踏み込んだことをいうと、先日田尻さんから県知事選の話を聞いて、最初県知事選に特化した原稿だったが、県知事選は今年の 10 月、まだ 3 か月ある。次回の会報は、例えば一回この知事選というテーマで作成して、その試みの中で 1 冊 500 円を 100 人に売ると 5 万円。それがどれだけ売れたか。難しいでとどまるのでなく、500 円にふさわしいものにして、法律に抵触しない方法でやっていくというのは、試みとして知事選がどう動いているの
か、動きの中でばかばかしい知事選でいいのか、というところがあって、ジャーナリステックな話題としてはどれだけ取材できるかわからないが、人脈を使ってやってみる。試みの中から可能性を見出していくというのはいいのではないか。

土井　　可能性とは何の可能性？

甲田　　ニュースレターの活用とか位置づけとか、マスコミへの影響力。そういったものがニュースレターの中ですくい出せるのか、ニュースレターそのものの可能性です。

「知事選候補者」報道の欠落部分

土井　　当方の力量による。田尻さんの発表は自民党の 2 人の背景についての説明であったけれど、それに対抗して産みの苦しみをしている人たちの動きについては、当然として触れられていないですよね。今のメデイアからの情報ですから。テレビも新聞も、最後に 3 行ほど付け加えてこういう表現でお茶を濁している。

「共産党を中心とした市民団体が候補者を模索している」「維新も出す予定だ」これだけです。

実態を反映しているが、でも何とかしなきゃならないという努力をずっと続けているのだが、今のメデイアは全然取材もしようともしない。なぜ候補者が生まれないかについての紹介もしない。取材もしないから、変に出ている二人の動きだけを追っている。こういう状態です。これだけだと申しわけないので、共産党に電話をするのでしょう。共産党が候補者を出すのでなく、「共産党が入った市民団体が候補者を出すようにしている」と共産党の方からも説明していると聞くが、メデイアには共産党だけになる。こんな事実に沿わない報道の仕方をずっと続けていることを許している我々の側。これが問題なんです、実は。

小原　　知って書かないことがどれだけあるか？

甲田　　反自民の候補者擁立が同じことの繰り返しで展望が開けぬままやってきた理由も大きなテーマ。

土井　　いっぱい要因があるからね。2015 年、16 年にできたことが今できない。何でもいっぱい要因がある。我々市民の側にも問題がある。

堀江　　それだったら 500 円で売れる。

土井　　一回はお付き合いはするが継続はしない。

甲田　　難しいけどそこら辺りも書かないと。

土井　　どこも書いていない。北日本は無理として、面白おかしく書く富山新聞も書かない。取材がないもの。

堀江　　関心がないから。

土井　　関心がないからか…

堀江　　関心があったら、取材して書いているでしょう。

土井　　僕が政治部長だったらそこが関心だけどね。石井、新田はどうでもいい話でないか。
　半分は反自民勢力なんだから。何で候補者を擁立しないのだというところに特化しないメデイア。何が問題なのか、こんな面白い材料はないのだが、本当はね。

報道をする側の考え違い

堀江　　新聞は、自分たちが書く新聞の対象を考え違いしている。何がニュースなのか？読んでも読まなくていいわと？

土井　　実態はそうです。

大島　　今土井さんが話された視点はニュースレターの記事にすべきですが、それを特集を組んで、数百円で売れるようなものを作ることは難しい。

甲田　　週刊文春の編集部では 4 人～ 5 人はいかに売れるかで作っているから、そういう点で物事を作っていくのは面白いかと思ったが、

大島　　しかし甲田さんが言うような売れるニュースレターを作っていくとすれば今のニュースレターの作り方ではない本格的なメデイアづくりの体制と準備が必要で、いくつもの段階をクリアしないと無理だと思います。手始めとして会の中心的活動がニュースレターの発行に位置付けていくとか…

土井　　やれることからやるとすれば、今のやり方の継続しかない。

大島　　その活用ですよね。今のやり方でどのように活用していくか。例会の中でニュースレターの承認が必要だが、正式な会報でないけど、会のメデイアとして位置づけ、もう少し書き手を増やし。

甲田　　インナーな会報でなく、できるだけ外に向けた内容にする。

サンフォルテ登録団体の申請

堀江　　例えばサンフォルテの一階フロアーのチラシ掲示コーナーに置く。

小原　　ジャーナリズムを考える市民連絡会とやまをサンフォルテ登録団体することできる。ひょっとしたら、県民会館や他の県の施設に置けるかもしれない。

他の市民活動からの多様な視点も

土井　　さっき話題になった高道さんに寄稿してもらったり、その時話題になっている事柄について、例えば不二越問題でいえば中川さんにも、メデイアがその問題で中川さんの動きを追ったりしているから、評価するところは評価して問題だなというところはその問題を書いてもらう。少し寄稿を含めて、ここまで作ってきたニュースレターも生かしながら見直していく。

我々、ジャーナリズムを考える市民連絡会とやまが何を目指して集まっているか、それをどう発展させるかという視点で活動していくことが必要だから、やれることをせいいっぱいやり続けることが今必要では。

せっかく沖縄に特化した小原さんが詳しいのだから、毎月でも、しかも事柄が次から次と出てくる。堀江さんだって具体的な活動をしておられるのだからコロナ禍と子供たちの食、多忙に従事している人たちの現状など、思っていることはいっぱいあると思う。そんなことなども書いてもらう。この間生活保護の問題について裁判活動もしているので、折に触れてということは可能なんですね。

そういう意味からするとやれることはまだあると思います。

小原　　それを編集会議を持ってこの問題があるねって、今ならコロナ問題と貧困問題を絡めて一つのテーマとして取り上げようと検討し、この視点からの記事を誰誰に書いてもらおうという風にしていけば、これだけではすまないものになる。

土井　　一回一回完璧を目指さないで、次の号はこうしましょうということはありうる。だからそういう意味では、甲田さんがこれでリタイアするというのはどうするか？

あれですか、後ろめたさが日々募ってくるのですか？後ろめたさが募ってくるとすると、前段で言った趣味で好き勝手なことを言っていることが多くなっている？

甲田　　楽になっているといわれる。

土井　　でも言う人がいないといけないのではないですか。言い続ける人がいないといけない。でないと変わらない。

甲田　　根が謙虚なものだから。

堀江　　せっかく集まってきているわけだから、毎号つらいとすれば２～３回に１回とかぐらいの気持ちでいいじゃないですか？

堀江　　取材記事でもいいじゃないですか。発表してもらった人、その人が書くのでなく、言った人はあまりに情報が多くて、どこからまとめていいかわからない。取材した人が重要だということをまとめる。

新聞記者でもない、市民が取材する難しさ

土井　　あの時気づいたが、朝日の道用さんが発信して、竹田某がしたり顔で講演しようとしたことが阻止できた

じゃないですか。あの時に道用さんのメールを見てすかさず朝日町の教育委員会に電話をしたあの時つくづく思った。昔なら、北日本新聞社会部です、政治部ですと言って直ぐ言えるのに「小杉の土井です」といい、「新聞で見たからちょっと聞かしてほしい」と聞いて、聞いたことをメールで発信したが、かって自由にできた取材がそんなにできるわけでない。トントンと入っていって､それはどうかと聞くことはできない。アポをとって時間をとって、何者かと、何者であるかを明らかにして、時には使い分けて。でもそういう難しい環境の中で聞けることと聞くことの限界がある。

新聞記者なら、そんなことを言っていいんですか？税金で仕事をする人が、ちゃんと納税者に説明できるようにしないといけないじゃないですか。この部屋は誰のお金であなたがいるのかわかっているんですかと詰め寄ることができたんです。昔はね。公害部長、あんたそこで偉い顔をしているが、この電気代は誰が払っていると思っているのかと言うと、説明責任が出てくる。納税者にちゃんと説明しなさい。

小原　今、そういう人（新聞記者）いないのではないですか。

土井　いないのでしょうね。

少し方向が出てきたんでないでしょうか。

大島　そうですね。

10 号完成で、合本を

堀江　具体的提案ですが、10 号になったら合本を作ってみんなに配ればいいと思う。メデイアとかに大々的に配り、実績を見える形にする。それまでに、会とニュースレターの位置づけを明確にする。

小原　ブログのアドレスをこんな小さなスペースに載せるのでなく、見えやすいところに掲載する。字も小さいので大きめに。

記事の信頼性を高める苦労

堀江　先週朝日新聞の金沢支局の記者が書いたのですが、路上生活者が支援によって特別定額給付金を受け取ることができたという記事は、大変苦労して書かれた記事です。私も取材を受けました。支援を必要とする当事者は載せてほしくないから取材はむずかしい。支援者が、支援について話すのですが、そこで当事者のプライバシーに触れざるを得ない。これは、やってはいけないこと。話をしている最中に気づいた。今回は私の取材について、また記事掲載について当事者の許可を取れたからいいようなものの、それでも、記者は誰かわからないような形で書かざるを得ない。しかし、それでは信頼される記事にはならない。私は、諸事情で住民登録がなくて給付申請ができない人が、窓口で相談して支援を受けたり、支援者がいれば申請できると思い、自分から取材を申し入れましたが、それを尊重して、見出しで形にしてもらえました。

小原　金沢の市議が 10 万円給付を受けられない状態の人を受けられるようにするための動きを記事にしたものですが、その市議と堀江さんと当事者、３者が明記してあったので記事としての信ぴょう性が高くなったと思う。森市議だけでなく複数の活動が書いてあった。

堀江　全国的なネットワークがあるのでそのメールも読んで、それも書いて、記事としての信ぴょう性を高めています。かなりベテランの記者ですが、そういう人だから悩んでいましたね。

今どきの新聞記者

この人は､金沢からですが､珍しく行きますと言ってきました。電話取材だけというのもあって､若い人だと「まず、当事者にちゃんと会ってちょうだい」とか､「全体像を知ってからあなたが書きたいような記事を書けばいい」

と言うと、一度など「聞くことにだけ答えてもらえたらいい」などと言いました。この記者は、別件で取材されたときには記事ができませんでした。「やはり…」と思いました。知りたい情報だけ仕入れて効率よく書こうとしても、書けないし、薄っぺらになる。対象が増えても、時間がかかっても、ていねいな取材が大切だと思う。これは書き手としての自分にも言えることです。

土井　先ほども言っていた高飛車な取材というのはそのこと？

堀江　他にもいろいろある。もともと、聞き手と対象の権力差があるから。

土井　その時は叱りつけてやってください。

堀江　電話、切りますよ。

土井　あってはならない態度ですから、ちゃんと叱りつけてくださいよ。とんでもない話。

堀江　そういう人はもともと支援とか支援者をバカにしている。叱ることすらできない。勝手にやれ、みたいな。

土井　バカバカしいことは沢山あるからね。まともに会話したくないなという者は確かにいる。取材しても書けない記者もいる。半分そーかな。

堀江　前だったらそういう時は断わってきた。

記者志望者の軽さ

土井　これもわからない。何で新聞記者になったのかと思う。社会部の時だったか「あっそうか」と思ってびっくりしたのは、新入社員の試験で志望欄に、県庁に入るか、北電に入るか、北銀に入るか、北日本に入るか、そんな選択だと聞いた。「あっそうか」と。そしたら何か社会的不正や理不尽なことに許せないとか、正義感に突き動かされて取材をするということを求めることをもともと無理な人たちなんだ、と。もっとも私が入った時もそんな何とかしたいなと入ってきた人たちばかりじゃ実はないのだが、でも 10 人に一人とか 50 人に一人とか、がいていいじゃないですか。

小原　そこが違うね。今のこの時でも、沖縄の新聞社 2 社とも、沖縄で新聞記者になりたかった記者がほとんどなのよ。

土井　だからですよ。琉球新報も沖縄タイムズの沖縄 2 社は、県民読者と相関関係にあり、県民の意識がピンボケ記事を書かせない。本来僕は、新聞記者になろうという人間が何ピンボケのことを言っているのか、わけわからないが、北銀や北電との並びに選んだうちの一つだということになると、しゃあないなと思う。でもどうなのか。新聞記者は確かに所属の会社から自由なジャーナリストでないかもしれないが、ジャーナリストになろうという気概があってもいいじゃないか、とも思う。

それを求めてしまうがとても無理ですね。でも無理だけど、せっかく何の問題もなく、ズカズカと行って取材できる立場なんですよ。しかも歴史の立会人としての任務もある。その人がおかしいと思って書かないと記録に残らない。なかったことになってしまうのだから。そんな重要な仕事をしているのに、何でなのか？

記者に聞いてみたい　市民をどう思っているの？

堀江　逆に言うと、新聞記者が取材対象の市民をどう思っているかを取材をするような会であったらいいかも？

土井　　決め決めにしないでどういうことなんですかと。

堀江　　彼らも自分の意欲をかき立てられないものを感じているから。

甲田　　チューリップテレビのＳ記者は取材現場を離れたのか？取材現場から、総務に移ったとか。

大島　　NHK 問題 ml の中では不二越問題に関する TBS 報道特集の報告は、小さな放送局で頑張っているとか、その番組をもとに勉強会をするという反応の投稿があり評判が良かったんですが。

堀江　　内容的には全然肝心なところを言っていなくて、被害者に寄り添う支援の会のやさしさだけが印象に残り、いま一つよいとはいえないと思っているのですが、現政権からすると、精一杯のところだったのでしょうか？

再度、うしろめたさについて

土井　　甲田さんの言われたことがずっと引っかかっているのですが、「自分が安全地帯にいて好き勝手に言うことを後ろめたいと」あなたの気持ちはわかるけど、だからといって口をつぐんでしまっていいわけじゃない。

小原　　本当に書くのやめると言っているの？

甲田　　僕はそう思うようになった。

土井　　そんなこと言ったらみんな後ろめたいことになる。それぞれに自分の守備範囲の中で精一杯言ったり、行動したりしているわけじゃないですか。ある特定のことに関しては本当に申しわけないと思う。身を挺して権力とぶつかり合っている、闘っている人たちもいることに比べれば、ぬくぬくとしたところに身を置いている後ろめたさは確かにある。

私なんかそういうことから言えば安全地帯にいて、発信して行動しているに過ぎない。だから口をつぐんでしまっていいのか。そうじゃないと思う。それぞれの持ち味の中でそれぞれが精一杯やって、全体として押し返していくということだってあっていい。欺瞞ですか？

甲田　　いや～、声なき声、つぶやきみたいな。

小原　　もっと大きな行動を、声を出そうと、そういうことをやろうということじゃないの。そういう企画を考えておられるなら、その中身を知りたい。だから 1 か月に 1 回は文章書けない？書けるでしょう。

堀江　　自分の立っている場所ってそれぞれあるので、そこを認識してそれも表現しつつ書くしかない。例えば言えること言えないことってあるよねという発信の仕方。

土井　　苦しんでいる人たちに言葉が届かない、というのは日常的に私たちが経験していること、確かに。でも真実は言い続けないとどうにもならない。そこはどうなんですか？

甲田　　問い詰められると…

土井　　思いを共有したいです。そういう一部を私も持っている。

小原　　私ね、ある意味では、一生懸命、力の限りをつくして権力の不正に立ち向かうというのは若い時ならできるけども、この年になったら、半分ふらふらしながら、思い出した時に自分がたまたま知ったことを、他の人にも

伝えたいなと思う程度で伝えられる時にそう思った時に伝えている。あとはボーっとしとると、それもありだなと。だから一人の市民としてやることってそれもありだなと思っていいんじゃないの？いつも一所懸命一生懸命やっとったらアカンって。

私なんか思うよ。沖縄の情報を時々人に伝えたくなって言うけども、でも、自分はどういう立場で沖縄の情報を伝えようとするか、沖縄と私の関係ってどういう関係よ。なぜ沖縄の情報を伝えるそういう立場にいるのか。そういうことをしてもいいのかということも結構思うし、本当に沖縄の米軍基地負担をなくしたいのだったら、ある人は、沖縄の基地を日本に引き取るべきだと考えるのは、それも一つ、そうだろうなと思う。それはわかるし、じゃあ、あなたはどう思っているのと言われたら、でもねと思ってしまう。

結局基地を沖縄に押し付けている立場でしかない。自分が沖縄から発せられる問題を富山で再発信していいのかって、思うよ。思いながらやっているから、罪なことをやっていることになるのでないかと時々思う。

大島　　大分時間も経過しました。最後の方は甲田さんが感じておられる後ろめたさをめぐっての意義深い話し合いにもなりました。ありがとうございます。

そろそろまとめなければなりません。

まとめとして

甲田さんからニュースレターについて売れるものにしていくという大胆な提起があったわけですが先ほども述べましたが、ニュースレターの位置づけがネット会員に向けた通信という限定的なものでしかない現段階のことを考えれば、そのことを一気に実現していくにはいくつものハードルを越えて整備していく必要があり、現実的には今の状況を生かしながらいくつかの点を見直していくという対応になると思います。

- 当会の目的とその課題を実現するための方法の確認と再検討
- ニュースレターの位置づけの見直し
- 会の外にも向けたメデイアへ
- 他の市民活動からのメデイア批評の寄稿／メデイア関係者に寄稿を呼び掛ける（書き手を増員）
- 編集委員会を実質的なものに（編集会議の実施等）
- 例会時に、ニュースレターや前回の例会についての意見交換の実施
- サンフォルテ登録団体の申請とニュースレターの掲示コーナーへの掲示

以上について、次回例会で話し合いたいと思います。

これで２時間にわたった座談会を終了します。みなさん、お疲れさまでした…。

（参加者：甲田さん、小原さん、土井さん、堀江さん、大島）

（記録／文責 : 大島）

（注）　朝日新聞　2020 年７月７日

朝日　2020. 7. 7

路上生活者に届け給付金

支援者ら本人確認や申請

「もらえないままの人もいるかも」